

## 巻 頭 言

下 向 井 龍 彦

『史人』第三号を刊行する。一九九七年三月に創刊し、一九九八年一月に第二号を出してから、長い長い中断の時期が続いた。短命な雑誌を三号雑誌というが、『史人』は三号にも届かず、二号で休刊に追い込まれ、世間はおろか私までも、『史人』のことなど忘れかけていた。

そもそも『史人』第三号は、一九九九年に刊行する予定であった。創刊号・第二号に続き、そこには一九九八年に提出した五人の卒業論文と私の小論の合わせて六編の論考が掲載されるはずであった。その第三号がまぼろしに終わってしまったのは、ひとえに私の怠慢によるが、編集作業を妨げるいくつかの事情が重なったことを弁明しておきたい。

私の個人的事情について言えば、なんといつても一九九九年八月五日に脳内出血で倒れて三ヶ月入院してしまったことである。このアクシデントが、その年のすべての予定を狂わせてしまった。退院後は、講談社日本の歴史07巻『武士の成長と院政』の執筆に一年半かかり切りになってしまい、その間、授業と読書会、卒論修論指導をこなすのが精一杯であった。また教育学部との合併などによって卒論指導学生が急激に減少したことも、『史人』刊行への情熱を減殺させることになった。さらに行政能力・政治能力において幼児に等しいこの私が、二〇〇二年から二年間、所属する教育学研究科社会認識教育学講座で慣れない講座主任を務め、心身ともにヘトヘトになったことも、『史人』刊行の障害となった。かくして『史人』は長い休眠期間に入ってしまったのであった。

かようにいったんは泡沫のごとく消えた『史人』だったが、足かけ三年の眠りから目覚めて、この度めでたく復刊することになった。復刊の機運は、二〇〇八年夏、渡邊誠氏を実行委員長に下向井研究室

読書会グループが事務局を引き受けて開催した全国古代史「サマーセミナーin宮島」が契機となつて、沸き上がった。渡邊君の指揮下で読書会のメンバーが結束してセミナーの準備・運営にあたり、セミナー第一日の全体会「儀式から見た平安時代国家論」（司会：今正秀氏）では、渡邊・齋藤拓海・山本佳奈と下向井が共同で研究発表を行った。そしてこのときの四人の研究発表を、九州大学の坂上康俊氏の力添えで『九州史学』一五六号「特集号 平安時代儀式研究の再活性化をめざして」に一緒に公表することができた。この盛り上がりを持続させるために自分たちの雑誌を出そう。このような声が誰からともなく出てきた。こうして『史人』が甦ることになったのである。

広島の古代史研究がグループとして高揚した時期は、これまで二回あった。それを全国古代史サマーセミナーと刊行図書で象徴させるなら、第一の高まりは「一九七七年in帝釈峡」から坂本賞三先生編『王朝国家国政史の研究』（吉川弘文館 一九八七年）にいたる時期、第二の高まりは『史学研究』一九九号（一九九三年）から「一九九五年in福山」にいたる時期であった。そして第三の高まりは、「二〇〇八年in宮島」から『九州史学』一五六号（二〇一〇年）を経て今日にいたる、と位置づけた。この下向井研究室読書会を舞台とする第三の高揚期を持続させることが、『史人』に与えられた使命であり、第一期・第二期にグループとして共に研究したメンバーも、この『史人』につどって盛り立てていただきたい。卒業論文を載せるという創刊時の志も持続させたい。

第三号には、巻頭論文に恩師坂本賞三先生から御高論を頂くことができた。先生は喜んで御寄稿してくださった。この『史人』を抛り所に、坂本先生が広島の地で開花させた「王朝国家論」を継承し創造的に発展させていきたい。『史人』が目指す進路は決まったようだ。

最後にこの記念すべき復刊号の編集を引き受けてくれた渡邊誠君に感謝したい。第三期を牽引しているのは彼である。（二〇一一年五月八日）